

在宅医療最前線

〈連載②〉

ナカノ在宅医療クリニック

鹿児島県
鹿児島市

中野一司院長

「往診だろう」
「こんなふうにして思っている患者とそ

在宅医療についてマスコミで報じられるようになってから久しいが、まだまだ誤解されている側面が少なくない。在宅医療を支える医師の訪問診療もそのひとつ。

「患者の自宅を定期的に訪ねて行う診療が訪問診療。一方、患者宅へ緊急的に訪れて行う診療

「患者の自宅を定期的に訪ねて行う診療が訪問診療。普及の先頭に立つ中野一司

緊急時に呼ばれる往診とはまったくの別物

院長だ。訪問診療は在宅療養患者の病状に特に変化が見られなくても、毎月2回以上、定期的に行われるのが一般的だ。

「訪問診療医は日頃から患者さんの病状や今後の推移について予測し、患者さんご本人やご家族の意向を踏まえ、適切な対処の仕方などを相談しておくことがもつとも大切といえるからです」
たとえば、死を回避でき



ない終末期に入った患者の場合、唾液などが誤って気道から肺へ流入し、その中に含まれた細菌などから誤嚥性肺炎を引き起こすケースが多い。

「その際、どうしたらいいのか。あらかじめ患者さんご本人の考えや死生観、人となりに接していれば、より適切な対応が可能となるのです」

重要なのは終末期ゆえに、治療そのものに限界があることだ。

「ご自宅で安らかに死にたいとの思いから在宅での治療を願う方もいます。また、ご自宅での生活を望みながら、最期まで可能な限りの医療を受けたいので病院への搬送を希望する方もおられます。できるだけ一人一人の患者さんの希望に沿うために、定期的な訪問診療が不可欠といえるのです」

一方、定期的な訪問診療なしに、何かあった時に呼ばれる往診のみでは、医師がその時初めて、患者の病状やその病状などについて知ることになりかねない。

「発熱などから誤嚥性肺炎を疑っても、原因を突き止める検査や治療のために在宅療養を切り上げ、病院へ

緊急搬送するという方法が選択できなくなってしまう」
すなわち、訪問診療なしに往診のみで対応するというのは、まさに治療優先の、従来のキニア志向の病院医療の考え方以外の何物でもない。

「一方、定期的な訪問診療 24時間365日対応の緊急往診で取り組むことで、初めてご自宅で患者さんの生活を最期まで支え見守るケア志向の在宅医療が実現できるのです」

(医療ジャーナリスト・松澤実)

毎月2回以上の定期的な訪問が患者を最期まで支え見守る

在宅療養を切り上げ、病院へ